

「蘭学の里」 中津市から世界トップレベルの医療を提供 骨髄炎と高気圧酸素治療の第一人者



真に役立つ研究を行い臨床に
応用することが医師の本分
です

特定医療法人 玄真堂 川鳶整形外科病院
理事長 川鳶 真人

Close up Interview

オランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』を翻訳し、『解体新書』を刊行した前野良沢や福沢諭吉など、多くの医師や蘭学者を輩出した大分県中津市。その「蘭学の里」中津市で世界のトップレベルの医療を提供しているのが特定医療法人玄真堂川鳶整形外科病院の川鳶真人理事長だ。川鳶理事長は「潜水医学界」のオースリティーでもあり、骨髄炎・潜水・潜函病による骨壊死や、高気圧酸素治療など整形外科分野における世界トップレベルの治療と研究は他の追随を許さない。川鳶整形外科病院は、一九八一年三月五日に川鳶氏がスタッフ十五名と共に開業した。

「この三月五日という日は、一七七一年に中津藩医である前野良沢が『ターヘル・アナトミア』の翻訳を開始した日です。開院に当たって、目標を『世界水準の医療を地域医療へ』と定め、三つの理念をモットーにこれまでスタッフ一同心を一つにして頑張ってきました」と振り返る。現在は特定医療法人玄真堂として、川鳶整形外科病院をはじめとして、クリニック、臨床医学研究所、介護老人保健施設、通所リハビリテーションセンターそれに訪問介護ステーションなどを運営している。高水準の医療をはじめ、急性期医療から慢性期ケアまでをトータルにサポートして、地域の重要な基幹病院としての役割を担っている。病院スタッフ総勢三百人の先頭に立つ川鳶理事長は、持ち前の魅力溢れる人柄とカリスマ的なリーダーシップを発揮して、地域医療の発展・充実に力を尽くしているのだ。

さまざまな難治性疾患に高気圧酸素治療が効果を発揮
潜水士の骨壊死を日本で初めて労災認定取得に導く

川鳶整形外科病院の特色の一つが高気圧酸素治療である。これは薬やメスを使わず純酸素を吸

入して血管や組織を活性化させ、骨髄炎や難治性潰瘍などを治す治療法だ。

この治療法は、骨や関節にバイ菌がつくといった骨・関節感染症に対する有効な併用療法としてのみならず、治りにくい潰瘍の治療や、血行の悪くなった動脈閉塞症、足のしびれがでる脊髄神経の病気などに広く応用されている。装置内の気圧を二〜三気圧上げることによって10倍〜20倍の酸素を体内に供給することができ、低酸素によって起きるさまざまな疾患を治す。

「この療法は元々潜水病・潜函病の減圧症や一酸化中毒の治療に使用されていたもので、その良好な治療成績が認められています」と川寫理事長は説明する。

しかし三十年前からいろいろな疾患に適應することが明らかになり、骨髄炎だけでなく脳浮腫や悪性腫瘍、難治性潰瘍を伴う末梢循環障害、褥瘡（じよくそう）、重度の熱傷、脊髄損傷や皮膚移植など非常に広範囲に及ぶ治療に使用されている。骨髄炎は治療しても再発を繰り返す非常にやっかいな疾患だが、この治療を受けると劇的に症状が鎮静する。足の切断につながる糖尿病性壊疽など、切断せずにすむのは患者にとつて大きな朗報だ。最近では脳浮腫やくも膜下出血、脳梗塞、脳血栓など脳神経外科分野での応用も広がっている。

川寫整形外科病院は大分県では唯一、第2種高気圧治療装置を三基備え、二十四時間体制で救急治療にあたっている。国内外からは延べ二十八万人の患者が治療に訪れ、年間の入院患者は二千人を超える。川寫理事長と高気圧酸素治療との運命的な出会いは、九州労災病院の時に取り組んだ減圧性骨壊死の研究のことだった。

「今は亡き天児民和病院長（国際整形災害医学会会長、九州大学名誉教授）に薦められ、潜水病に伴う減圧性骨壊死の研究を始めました」と当時を振り返る。もともとこの病院には多くの潜水病患者が高気圧治療を受けに来ており、骨壊死が頻発していたにもかかわらず原因究明が出来ていなかった。

朝早くから夜遅くまで臨床と手術。その後には術後回診。そして深夜二時頃まで減圧症と骨壊死の研究に取り組む超人的な毎日を送っていた。有明海・大浦漁協で調査も行い、潜水士の半数以

上骨壊死を起こしている現実や、日本の潜水士の労働環境が劣悪なものであることを知り、何とかしなければ、という熱い思いがたぎったという。

最先端骨髄炎治療「オゾンナノバル洗浄」を共同研究 画期的な「川寫式局所持続洗浄チューブ」が海外で高い評価

英国では骨壊死が労災認定されていた。そこで川寫理事長は、「わが国でも労災認定を、と海外の症例を集め潜水士の診断記録を携えて何度も労働省に掛け合いました」と懐かしむ。こうした努力が実り、一年後の一九七五年には、日本初の潜水士による骨壊死の労災認定第一号を取得した。さらに医療費の節減効果も訴求し、骨髄炎の高気圧酸素治療が保険適用となる快挙も成し遂げた。高気圧酸素治療は現在NASAのシャトル計画にも応用されている先進の治療法でもある。

川寫理事長は日本のみならず海外各地で講演やシンポジウムを行い、国際セミナー、学会なども自ら主催



第3回日米宇宙・潜水高気圧環境医学合同学会にて（前列中央が川寫理事長）

するなど、自他ともに認める高気圧酸素治療の第一人者だ。

米国をはじめ世界各国の研究者との共同研究や、数々の国際学会で毎年論文を発表するスタン

スは病院開業以来変わらない。病院での診療の傍らなので精神的にも肉体的にもハードな毎日だ。

辛いことも多いが、川寫院長は、「苦しみの中から本当の楽しみが生まれる」という天児先生の言葉を思い出しながら頑張っています」と微笑む。二〇〇二年には国際潜水高気圧環境医学会からチャールズ・シリリング賞を受賞した。現在も最先端骨髄炎治療である、オゾンナノパブル洗浄を東京医科歯科大学と共同研究するなど常に世界にさきがけ発信している。

川寫理事長が骨髄炎治療を手がけるようになったのは、虎の門病院時代にさかのぼる。八年間二十回もの骨髄炎手術を受けた二十歳の女性患者との出会いだった。

「何度も膿が出ていたのを試行錯誤し、一回の局所持続洗浄で治癒し退院されてね。嬉しくて言葉にならないほどの感動でした」

それからというもの日夜研究に没頭。膿を排出される度にチューブが閉塞する課題を、骨にチューブを入れて消毒薬で洗浄する、川寫式局所持続洗浄チューブの考案でクリアし学会で発表した。

この画期的な発案は骨髄炎の再発率を激減させ、川寫式チューブを用いた治療法は、骨髄炎治療の国内外のテキストにも紹介されるスタンダード治療となった。

現在日本整形外科学会の卒業研修ビデオにも収録。海外でも高い評価を受け、骨髄炎患者の多い中国でも専門病院が北京に設立するに至る。この川寫式局所持続洗浄チューブと高気圧酸素治療を応用することで骨髄炎の再発率は激減。現在五%台をキープしている。

母親は八十歳まで歯科開業医として現役を貫いた女傑 母から受け継ぐ『自強不息』の精神

「僕は臨床で疑問に思ったことやヒントになったことをテーマに研究をします。医者は常に改善を目指し研究に邁進するべきです。患者さんに本当に役立つ研究を行い臨床に応用する。それが医者としての本分だと思います」ときっぱり語る。そんな川寫氏の真摯な学究の人となりを作り上げたのが、わが国初の女子歯科医学専門学校である東洋女子歯科医学専門学校二期生の母、川寫ミツエさんだ。

明治四十二年の生まれで、明治、大正、昭和、平成を生き抜いてきた気骨溢れる女性歯科医である。八十歳まで現役の開業医として活躍し、勉強会にも出席する硬骨の、まさに女傑である。

父の眞濟氏は、川寫理事長が三歳の時に戦病死した。このため母親のミツエさんが女手一つで生活を支えてきた。今でこそ女性歯科医師は珍しくないが、当時は極めて珍しい、女性歯科医師の先駆者の存在であった。ミツエさんは昨年九月に一〇二歳で天寿を全うした。

が、「最期まで謡曲、短歌、写経と自ら課題を作り、動物や花や盆栽を愛し、神仏を尊んでいました。九十九歳まで歩行訓練を行い、その時の書初めも『希望』。勉強することは苦しくて辛いこともありますが、続けていれば必ず楽しくなるという『自強不息』の精神と生き様は、私たちも学ぶことが多かったですね」と懐かしむ。医師として人間として、周りから愛され尊敬されてきたという母。そんなミツエさんの遺伝子は、川寫氏に受け継がれ脈々と息づいている。



川寫理事長の著書。中津市・蘭学の里の歴史学研究の第一人者でもある

超高齢化社会に突入した現在、高齢者に圧迫骨折などの患者が増加している。病院だけでなく隣接の外来患者中心の、かわしまクリニックと併せ一日四〇〇〜五〇〇名が来院し、人工関節、膝関節、手の外科など各分野のスペシャリストの専門医がさまざまな手技を取り入れた治療を行っている。八〇〇〇件にのぼる関節鏡手術なども高齢患者に積極的に行い、リハビリセンターでは40名のスタッフがマンツーマン指導で支援。短期間での回復とADL（生活日常動作）の維持・向上に

尽力する。

二〇一〇年に病院機能評価機構のVer.6
を取得

「職業を通じて社会に奉仕する」をモットーに地域貢献活動

川寫整形外科病院、かわしまクリニックなどを運営する特定医療法人玄真堂は、老人保健施設「なのみ」をはじめ、訪問看護ステーション、通所リハビリセンターなども併設している。

地域連携事業の一環として、スタッフが交代で出向いて介護予防などの指導を行っている。

また、大分県の北部圏域中津地域リハビリテーション広域支援センターとしての役割を担って、公民館や中津市の行事、高齢者の転倒予防教室に年間数十回にわたって専門スタッフを派遣す



地域全体で総合病院の実現を目指す川寫整形外科病院の外観

るなど「職業を通じて社会に奉仕する」をモットーに地域貢献活動を精力的に展開している。

さらに病院の安心・安全機能を水準以上に維持するため、二〇〇〇年に一般病院としては大分県で最初の日本医療機能評価機構の認定を受け、十年後の二〇一〇年には病院機能評価Ver.6も取得した。川寫理事長は病院の質の向上だけでなく、人材育成にも注力してきた。川寫理事長の理念と志に賛同する優秀な医師が日本中から集まっている。国内外で開催される学会でも積極的に研究発表を行なう。

「学会活動があつてこそ、初めて臨床に生気がみなぎりパイオニア精神が生まれる」というのは川寫理事長の持論だが、「毎年海外研修を行っています。医師や看護師も日々の診療の傍ら、マニュアル本などを執筆するなど、お互いが切磋琢磨して研鑽を重ねています」とアピールする。

川寫理事長は病院内のスタッフ間のコミュニケーション力の向上にも力を入れている。毎週の総回診や四十人以上が集まる術前・術後のカンファレンスやリスクマネージメント委員会などの会合が熱心に行なわれている。

「自分の時間を削ってでもカンファレンスを持つことは重要です。スタッフが病院の質はすべて患者さんに還元されるのですから」という川寫理事長は、月に二十本以上のカンファレンスを実施する。さらに院内感染を防ぐ様々な研修や活動、中国研修生大分大学医学部学生実習の受け入れなど病院の活性化や技術向上にいとまがない。

『地域全体で総合病院』実現に向け病院間の連携に注力

中津の蘭学と医学の歴史を学ぶ「マンダラゲの会」を主催

PROFILE

川島真人 (かわしま・まひと)

昭和19年8月3日生まれ。大分県中津市出身。医学博士。東京医科歯科大学医学部卒業。虎の門病院、九州労災病院を経て昭和56年川島整形外科開院。同61年特定医療法人玄真堂理事長就任。東京医科歯科大学臨床教授。

日米宇宙・潜水・高気圧医学合同学会会長。大分県病院協会会長。日本高気圧環境・潜水医学会副代表理事。国際潜水高気圧環境医学研究会財団委員。中国河南医科大学骨科学研究所名誉所長・教授。整形災害外科学研究助成財団理事。大分大学非常勤講師。北京聖濟骨髄炎医院名誉院長。中国海洋科学技術センター名誉主任。中国河南省南召骨科学医院名誉院長。高神大学(釜山)医学部客員教授。日本医学史学会理事。日本骨・関節感染症学会名誉会員。日本災害医学会評議員。九州高気圧環境医学会世話人。財団法人童心会館常務理事。中津市文化財調査委員。マンダラゲの会会長。中津地方文化財協議会会長。

著書に『白衣と花ひとすじ』『水滴は岩をも穿つ』(共に梓書院)『九州の蘭学〜越境と交流〜』(思文閣出版)『中津藩 蘭学の光芒〜豊前中津医学史散歩〜』『蘭学の里・中津〜川島真人エッセイ集〜』『医は不仁の術、務めて仁をなさんと欲す〜統豊前・中津医学史散歩〜』『蘭学の里ここに湧く〜豊前・医学史散歩〜』(共に西日本臨床医学研究所)がある。

INFORMATION

特定医療法人 玄真堂 川島整形外科病院

施設 川島整形外科病院、かわしまクリニック、(有)西日本臨床医学研究所、老人保健施設“なのみ”、中津圏地域リハビリテーション広域支援センター、かわしま介護保険サービスセンター、介護ショップハイジ、訪問看護ステーションかわしま、ヘルパーステーションかわしま、通所リハビリセンター

所在地 〒871-0012 大分県中津市宮夫14-1
TEL 0979-24-0464 FAX 0979-24-8053
URL <http://www.coara.or.jp/~gensin/>

職員数 300人

アクセス ●日豊本線中津駅からタクシー5分
バス10分・宮夫下車



設立 昭和56年3月

診療科目 整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・脳神経外科

診療時間 平日(月-金) 午前8:00-12:00
午後2:00-7:30

土曜日 午前8:00-12:30 午後休診
日曜日 休診

「地域で連携していかなければ、地域の医療体制は崩壊する」と断言する川島理事長は二ヶ月に一回、地域における医療水準向上のために「二豊整形外科フォーラム」「二豊リウマチフォーラム」「中津整形外科フォーラム」などを開催している。これは日本のトップレベルの教授や医師を招いての勉強会で、川島理事長は他の医療機関の医師や職員の研修にも役立つと考えている。「自分の病院だけでなく地域全体の医療水準を上げていくことが重要」として『地域全体で総合病院』という構想実現に向け、病院間での患者の受け入れシステム整備も進めている。技術的、学術的に世界トップレベルの医療を維持する目的で、何より患者本位の選りすぐれた医療を提供しようという熱い思いが、スタッフのモチベーションを一層高める。そして川島理事長のもう一つのライフワークが中津市の文化振興だ。川島理事長は中津市「蘭学の里」の医学研究の第一人者で、中津地方文化財協議会の会長も務める。地域の文化や歴史を研究、村上医家史料館や大江医家史料館なども川島理事長の尽力によるところが大きい。中津の蘭学と医学の歴史を勉強する「マンダラゲの会」を主催する。マンダラゲとはナス科の薬用植物で、華岡青洲が世界で初めてマンダラゲを主成分とする「通仙散」を使用して全身麻酔を行った。病院の前庭には華岡青洲の大坂分塾の弟子、大江雲澤家の裏庭の薬草園から分けて貰って植樹したマンダラゲの花が訪れる人々を迎える。昨年三十周年を迎えた川島整形外科病院は二〇一三年竣工予定でクリニックを含む病院全体の増改築を行っている。

高野長英の学問訓「水滴は岩をも穿つ」を引き合いに川島理事長は、「一筋の道を深く掘り進めていけば、その井戸の底にこそ世界に通じる水脈がある。真のインターナショナルリズムは外の世界にあるのではなく、自らの足場にあると思います」と静かに語る。

日本の医学・蘭学の発祥地である「蘭学の里」大分県中津市。今この地から、歴史に名を刻む開明進取のドクターが生まれようとしている。